

で禁じられてはいるが、少々ならかまわないと思う」、「法律で禁じられてはいるが、それを守る必要は全然ないと思う」の3件法で回答してもらった。

「法律で禁じられているからすべきではないと思う」と答えた者は、有機溶剤非乱用者では男性300人(71.8%)、女性70人(47.9%)だったのに対し、有機溶剤乱用者では男性24人(20.2%)、女性19人(13.6%)と少なかった。

一方、「少々ならかまわないと思う」、「法律を守る必要は全然ないと思う」という許容的回答をした者は、乱用者では男性90人(75.6%)および女性117人(83.5%)、一方、非乱用者では男性71人(17.0%)および女性51人(35.0%)と少なかった。

以上、男女とも乱用者は有意に有機溶剤乱用に許容的であった(それぞれ、 $\chi^2=141.6$ , d.f.=2,  $p<.01$ . ;  $\chi^2=55.1$ , d.f.=2,  $p<.01$ ).

#### 5) 有機溶剤乱用禁止への態度(表15, 16)

法律で有機溶剤乱用を禁止していること自体への意見を尋ねた。「禁止することを当然」としているのは非乱用者では男女それぞれ238人(56.9%)、47人(32.2%)であったのに対し、有機溶剤乱用者では「禁止することを当然」とした者は男女それぞれ30人(25.2%)、19人(13.6%)にすぎなかった。「有機溶剤くらい禁止しなくても良い」「そもそも法律で決める必要はなく、個人の好きにさせればよい」を合わせた有機溶剤乱用に肯定的意見が、有機溶剤乱用者では、男女それぞれ53人(44.5%)、83人(59.3%)あり、乱用者よりも多かった(男女それぞれ $\chi^2=67.0$ , d.f.=3,  $p<.01$ ;  $\chi^2=31.4$ , d.f.=3,  $p<.01$ ).

#### 6) 有機溶剤の害知識(表17, 18)

有機溶剤乱用の影響として、急性中毒死、多発神経炎、精神病状態、無動機症候群、フラッシュバックについて尋ねた。

これらの害については、精神病状態が有機溶剤乱用の有無にかかわらず男女とも良く知られていた。すべての害について有機溶剤乱用者の方が、非乱用者よりも有機溶剤の害を知っている者が多かった。また、乱用者・非乱用者とも女性の方が男性よりも害知識がある傾向にあった。

#### 7) 有機溶剤で体験した症状(乱用者)(表19)

表19 有機溶剤で体験した症状(有機溶剤乱用者)

	男性乱用者		女性乱用者	
	人数	%	人数	%
精神病状態	41	34.5	61	43.6 1)
フラッシュバック	25	21.0	41	29.3 2)
多発神経炎	10	8.4	19	13.6 3)
無動機症候群	23	19.3	49	35.0 4)

1)  $\chi^2=0.8$ , d.f.=1, ns  
2)  $\chi^2=1.2$ , d.f.=1, ns  
3)  $\chi^2=1.1$ , d.f.=1, ns  
4)  $\chi^2=6.0$ , d.f.=1,  $p<.05$

表20 有機溶剤の害知識と乱用抑止(有機溶剤乱用者)

	男性乱用者		女性乱用者	
	人数	%	人数	%
しなかったと思う	34	28.6	17	12.1
やはりしていたと思う	69	58.0	105	75.0
無回答	16	13.4	18	12.9

( $\chi^2=11.6$ , d.f.=1,  $p<.01$ )

表21 施設退所後、乱用しないと思うか(有機溶剤乱用者)

	男性乱用者		女性乱用者	
	人数	%	人数	%
絶対やらないと思う	86	72.3	68	48.6
多分やらないと思う	17	14.3	49	35.0
多分やると思う	8	6.7	19	13.6
絶対やると思う	8	6.7	2	1.4

( $\chi^2=21.4$ , d.f.=3,  $p<.01$ )

有機溶剤による症状としては精神病状態が男性乱用者41人(34.5%)、女性乱用者61人(43.6%)と最も多かった。フラッシュバックも男性乱用者25人(21.0%)、女性乱用者41人(29.3%)に見られた。精神病状態、フラッシュバック、多発神経炎に性差は見られなかったが、無動機症候群の訴えは女性に多かった( $\chi^2=6.0$ , d.f.=1,  $p<.05$ ).

しかし、これらは本人の訴えであるので客観的に正確な診断ではない。

#### 8) 有機溶剤の害知識と乱用抑止(表20)

有機溶剤乱用の有害性の知識が有機溶剤乱用を抑止するかどうかを有機溶剤乱用者に尋ねた。

「害を知っていたら吸引しなかったと思う」が男性乱用者では34人(28.6%)、女性乱用者では17人(12.1%)であった。一方、「やはりしていたと思う」は男女乱用者それぞれ69人(58.9%)、105人(75.0%)であった。

#### 9) 施設退所後、乱用しないと思うか(有機溶剤乱用者のみ)(表21)

表22 退所後、乱用すると思う理由(退所後「多分やる」「絶対やる」と答えた者)

	男性乱用者		女性乱用者	
	人数	%	人数	%
誘われたらやると思うから	9	56.3	8	38.1
今もやりたいと思っているから	0		10	47.6
いやなことがあったらやると思うから	4	25.0	15	71.4
なんとなくそう思うから	12	75.0	7	33.3

1)  $\chi^2=0.6$ , d.f.=1, ns  
 2)  $\chi^2=10.2$ , d.f.=1, p<.01  
 3)  $\chi^2=7.1$ , d.f.=1, p<.01  
 4)  $\chi^2=4.0$ , d.f.=1, p<.05

表23 周囲のブタン乱用薬害者

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
いた	51	9.3	46	15.3
いない	462	84.0	230	76.4
無回答	37	6.7	25	8.3

( $\chi^2=7.5$ , d.f.=1, p<.01)

表24 ガス入手困難さ

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
簡単に手に入る	224	40.7	161	53.5
少々苦労するが、なんとか手に入る	18	3.3	15	5.0
ほとんど不可能だ	24	4.4	11	3.7
絶対不可能だ	120	21.8	28	9.3
無回答	164	29.8	86	28.6

( $\chi^2=26.1$ , d.f.=3, p<.01)

表25 ブタン乱用開始年齢

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
10歳以下	4	4.2		
11歳	7	7.3	5	6.0
12歳	20	20.8	18	21.4
13歳	29	30.2	33	39.3
14歳	14	14.6	18	21.4
15歳以上	1	1.0	1	1.2
経験はあるが年齢はおぼえていない	2	2.1	6	7.1
無回答	19	19.8	3	3.6

( $\chi^2=7.1$ , d.f.=6, p<n.s.)

表26 最もしていた時のブタン乱用頻度

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
1年で数回	32	33.3	20	23.8
月に数回以上	30	31.3	32	38.1
ほとんど毎日	11	11.5	25	29.8
無回答	23	24.0	7	8.3

( $\chi^2=8.2$ , d.f.=2, p<.05)

表27 ブタン乱用への態度(男性)

	ガス乱用			
	経験有		経験無	
	人数	%	人数	%
すべきではないと思う	14	14.6	151	34.4
少々ならかまわないと思う	37	38.5	27	6.2
かまわない	30	31.3	22	5.0
知らなかった	8	8.3	204	46.5
無回答	7	7.3	35	8.0

( $\chi^2=163.1$ , d.f.=3, p<.01)

表28 ブタン乱用への態度(女性)

	ガス乱用			
	経験有		経験無	
	人数	%	人数	%
すべきではないと思う	11	13.1	49	24.0
少々ならかまわないと思う	21	25.0	24	11.8
かまわない	40	47.6	32	15.7
知らなかった	8	9.5	77	37.7
無回答	4	4.8	22	10.8

( $\chi^2=48.8$ , d.f.=3, p<.01)

表29 ブタンの薬害知識(男性)

	ガス乱用			
	経験有		経験無	
	人数	%	人数	%
精神病状態	27	28.1	53	12.1 1)
急性中毒死	30	31.3	48	10.9 2)
いずれも知らなかった	46	47.9	338	77.0 3)

1)  $\chi^2=17.0$ , d.f.=1, p<.01  
 2)  $\chi^2=27.6$ , d.f.=1, p<.01  
 3)  $\chi^2=38.4$ , d.f.=1, p<.01

表30 ブタンの薬害知識(女性)

	ガス乱用			
	経験有		経験無	
	人数	%	人数	%
精神病状態	32	38.1	55	13.2 1)
急性中毒死	22	26.2	42	10.0 2)
いずれも知らなかった	41	48.8	130	31.1 3)

1)  $\chi^2=2.7$ , d.f.=1, ns  
 2)  $\chi^2=0.1$ , d.f.=1, ns

今回施設を退所した後有機溶剤を再び乱用すると思うかどうかを乱用者に尋ねた。その結果、「多分やると思う」「絶対やると思う」と答えた者は男性ではそれぞれ8人(6.7%)、女性ではそれぞれ19人(13.6%)、2人(1.4%)であった。「絶対やらないと思う」は男女それぞれ86人(72.3%)、68人(48.6%)であった。退所後の有機溶剤乱用の可能性には性差がある( $\chi^2=21.4$ , d. f. =3,  $p<.01$ )。

#### 10) 退所後、乱用すると思う理由(退所後「多分やる」「絶対やる」と答えた者のみ)(表22)

上記退所後乱用すると思うと答えた者にその理由を尋ねた。男性では「なんとなくそう思うから」が12人(75.0%)が最も多く、女性では「嫌なことがあったらやると思うから」が15人(71.4%)で最も多かった。

### (4) ブタン乱用

#### 1) 周囲のブタン乱用による害(表23)

身近にブタン乱用の結果、病気や異常になった人がいたかどうか訪ねた。

その結果、男性の51人(9.3%)、女性の46人(15.3%)が身近にブタン乱用の結果と思われる異常を訴える人がいたと答えていた。女性に周囲でブタンによる害のあった者が多かった( $\chi^2=7.5$ , d. f. =1,  $p<.01$ )。

#### 2) ブタン入手困難さ(表24)

ブタンの入手が困難であるかどうかについて尋ねた。

簡単に手に入ると回答したのは、男性では224人(40.7%)、女性では161人(53.5%)であり、男女とも半数以上の者がブタン入手は容易としていた。女性の方がブタンは簡単に手に入りやすいと考えていた( $\chi^2=26.1$ , d. f. =3,  $p<.01$ )。

#### 3) ブタン乱用開始年齢(表25)

ブタン乱用開始年齢は、男女とも13歳が30%以上を占め最も多かった。つづいて12歳、14歳が多かった。小学生以下である11歳以下も男女それぞれ11人(11.5%)、女性では5人(6.0%)みられた。

#### 4) ブタン乱用頻度(表26)

ブタンを最も乱用していた時期の吸引頻度を尋ねた。その結果、女性の方が乱用頻度が多かった

( $\chi^2=8.2$ , d. f. =2,  $p<.05$ )。男性では「ほとんど毎日」が11人(11.5%)であったのに対し女性では25人(29.8%)と多かった。一方、年に数回しか吸引しなかったとした者が男性では32人(33.3%)であったのに対し女性では20人(23.8%)と少なかった。

#### 5) ブタン乱用への態度(表27, 28)

この項目は、男女ごとにブタン乱用経験別に比較した。ブタン乱用についてどう思うかを、「すべきではない」、「少々ならかまわないと思う」、「ならかまわないと思う」の3件法で回答してもらった。

「すべきではない」と答えた者は、ブタン非乱用者では男性151人(34.4%)、女性49人(24.0%)だったのに対し、乱用者では男性14人(14.6%)および女性11人(13.1%)と少なかった(男女それぞれ $\chi^2=163.1$ , d. f. =3,  $p<.01$ ;  $\chi^2=48.8$ , d. f. =3,  $p<.01$ )。非乱用者ではブタン吸引を知らなかった者が男女それぞれ204人(46.5%)、77人(37.7%)と多かった。

#### 6) ブタンの害知識(表29, 30)

ブタン吸引の影響として、精神病状態、急性中毒死について尋ねた。

非乱用者では、いずれも知らなかった者が男性338人(77.0%)女性130人(31.1%)と多くを占めていた。男性乱用者では精神病状態、急性中毒死を知っていたものはそれぞれ27人(28.1%)、30人(31.3%)であり、非乱用者よりもブタン吸引の害をよく知っていた( $\chi^2=17.0$ , d. f. =1,  $p<.01$ ;  $\chi^2=27.6$ , d. f. =1,  $p<.01$ )。女性では乱用者と非乱用者の間でこれらの害知識それぞれについては差が見られなかった( $\chi^2=2.7$ , d. f. =1,  $p<ns$ ;  $\chi^2=0.1$ , d. f. =1,  $p<ns$ )。しかしいずれも知らなかったも者は非乱用者で多かったc

#### 7) ブタンで体験した症状(乱用者)(表31)

乱用者において体験した症状を尋ねた。その結果ブタン乱用によって精神病状態を体験した者は男女それぞれ15人(15.6%)、27人(32.1%)であり、女性で精神病症状の体験率が高かった( $\chi^2=9.9$ , d. f. =1,  $p<.01$ )。フラッシュバック体験率は男女それぞれ15人(15.6%)、13人(15.5%)であり、性差はみられなかった( $\chi^2=0.1$ , d. f. =1, ns)。

表31 ブタンで体験した症状(乱用者)

	男性乱用者		女性乱用者	
	人数	%	人数	%
精神病状態	15	15.6	27	32.1 <sup>1)</sup>
フラッシュバック	15	15.6	13	15.5 <sup>2)</sup>

1)  $\chi^2=9.9$ , d.f.=1, p<.01  
2)  $\chi^2=0.1$ , d.f.=1, p= ns

表33 ブタンの入手方法(ブタン乱用者のみ)

	男性乱用者		女性乱用者	
	人数	%	人数	%
コンビニで購入	42	43.8	52	61.9 <sup>1)</sup>
日用品売り場で購入	24	25.0	25	29.8 <sup>2)</sup>
人からもらった	29	30.2	57	67.9 <sup>3)</sup>
万引きした	38	39.6	46	54.8 <sup>4)</sup>

1)  $\chi^2=4.4$ , d.f.=1, p<.05  
2)  $\chi^2=0.3$ , d.f.=1, ns  
3)  $\chi^2=23.0$ , d.f.=1, p<.01  
4)  $\chi^2=3.0$ , d.f.=1, ns

表35 施設退所後、乱用しないと思うか(ブタン乱用者のみ)

	男性乱用者		女性乱用者	
	人数	%	人数	%
絶対やらないと思う	59	61.5	49	58.3
多分やらないと思う	19	19.8	27	32.1
多分やると思う	8	8.3	5	6.0
絶対やると思う	2	2.1	1	1.2
無回答	8	8.3	2	2.4

( $\chi^2=3.1$ , d.f.=2, ns)

表37 ブタンと有機溶剤のうち薬物として良いのは

(ブタンおよび有機溶剤同時乱用)

	男性乱用者		女性乱用者	
	人数	%	人数	%
ブタン	17	29.8	10	14.3
シンナー	18	31.6	43	61.4
どちらともいえない	13	22.8	15	21.4
無回答	9	15.8	2	2.9

( $\chi^2=9.0$ , d.f.=2, p<.05)

表39 ブタンと有機溶剤のうち、やめられなくなるのは

(ブタンおよび有機溶剤同時乱用)

	男性乱用者		女性乱用者	
	人数	%	人数	%
ブタン	10	17.5	8	11.4
有機溶剤	23	40.4	48	68.6
どちらともいえない	12	21.1	13	18.6
無回答	12	21.1	1	1.4

( $\chi^2=4.2$ , d.f.=2, ns)

表32 ブタンの薬害知識と乱用抑止(ブタン乱用者のみ)

	男性乱用者		女性乱用者	
	人数	%	人数	%
しなかったと思う	35	36.5	20	23.8
やはりしていたと思う	44	45.8	58	69.0
無回答	17	17.7	6	7.1

( $\chi^2=6.0$ , d.f.=1, p<.05)

表34 乱用したガスの種類手方法(ブタン乱用者のみ)

	男性乱用者		女性乱用者	
	人数	%	人数	%
つめかえ用ライターガス	52	54.2	68	81.0 <sup>1)</sup>
カセットコンロ用ガス	29	30.2	33	39.3 <sup>2)</sup>
100円ライター	34	35.4	44	52.4 <sup>3)</sup>
その他	11	11.5	9	10.7 <sup>4)</sup>

1)  $\chi^2=11.5$ , d.f.=1, p<.01  
2)  $\chi^2=1.1$ , d.f.=1, ns  
3)  $\chi^2=4.0$ , d.f.=1, p<.05  
4)  $\chi^2=0.1$ , d.f.=1, ns

表36 退所後、乱用すると思う理由

(退所後「多分やる」「絶対やる」と答えた者のみ)

	男性乱用者		女性乱用者	
	人数	%	人数	%
誘われたらやると思うから	8		5	
今もやりたいと思っているから	3		6	
いやなことがあったらやると思うから	4		2	
なんとなくそう思うから	7		5	

表38 ブタンまたは有機溶剤を好む理由

(ブタンおよび有機溶剤同時乱用者)

	ガスを好む理由		有機溶剤を好む理由	
	人数	%	人数	%
幻覚が強い	6	23.1	19	31.7 <sup>1)</sup>
気持ち良くなる	12	46.2	51	85.0 <sup>2)</sup>
使い方が簡単	15	57.7	11	18.3 <sup>3)</sup>
手に入れやすい	22	84.6	19	31.7 <sup>4)</sup>
効き目がはやい	11	42.3	27	45.0 <sup>5)</sup>
警察などの捕まりにくい	12	46.2	3	5.0 <sup>6)</sup>
その他	4	15.4	10	16.7 <sup>7)</sup>

1)  $\chi^2=0.6$ , d.f.=1, ns  
2)  $\chi^2=14.0$ , d.f.=1, p<.01  
3)  $\chi^2=13.3$ , d.f.=1, p<.01  
4)  $\chi^2=20.4$ , d.f.=1, p<.01  
5)  $\chi^2=0.1$ , d.f.=1, ns  
6)  $\chi^2=21.3$ , d.f.=1, p<.01  
7)  $\chi^2=0.0$ , d.f.=1, ns

表40 ブタンと有機溶剤のうち、薬物として害があるのは

(ブタンおよび有機溶剤同時乱用者)

	男性乱用者		女性乱用者	
	人数	%	人数	%
ブタン	10	17.5	7	10.0
有機溶剤	21	36.8	33	47.1
どちらもたいては害はない	1	1.8		
どちらも同じくらい害がある	7	12.3	19	27.1
良く分からない	5	8.8	9	12.9
無回答	13	22.8	2	2.9

( $\chi^2=6.0$ , d.f.=4, ns)

## 8) ブタンの害知識と抑止(表32)

ブタンの害知識がブタン吸引を抑止するかどうか検討するためブタン乱用による害を知っていたら乱用しなかったかどうかを乱用者に尋ねた。「害を知っていたら吸引しなかったと思う」が男性35人(36.5%)、女性20人(23.8%)であり、「やはりしていたと思う」は男女それぞれ44人(45.8%)、58人(69.0%)であった。女性の方がやはりしていたと思うと回答した者が多かった( $\chi^2=6.0$ , d. f. =1,  $p<.05$ )。

## 9) ブタンの入手方法(表33)

ブタン乱用者に各種吸入ガスの入手方法を尋ねた。男性では「コンビニで購入」42人(43.8%)、「万引き」38人(39.6%)、「人からもらった」29人(30.2%)、「日用品売り場で購入」24人(25.0%)の順であった。

一方、女性は、「人からもらった」57人(67.9%)が最も多く、以下「コンビニで購入」52人(61.9%)が「万引き」46人(54.8%)、「日用品売り場で購入」25人(29.8%)の順であった。

## 10) 乱用したブタンの種類入手方法(表34)

乱用に用いられたガスの種類は、詰め替え用ライターガスが最も多く、男女それぞれ52人(54.2%)、68人(81.0%)であった。続いて100円ライター男性34人(35.4%)女性44人(52.4%)、カセットコンロ用ガス男性29人(30.2%)女性33人(39.3%)などであった。

## 11) 施設退所後、乱用したいと思うか(ブタン乱用者のみ)(表35)

今回施設を退所した後ブタンを再び乱用すると思うかどうかを乱用者に尋ねた。その結果、「多分やると思う」あるいは「絶対やると思う」と答えた者は男性では10人(10.4%)、女性では6人(7.2%)であった。「絶対やらないと思う」は男女それぞれ59人(61.5%)、49人(58.3%)であった。退所後のブタン乱用の可能性には性差はなかった( $\chi^2=3.1$ , d. f. =3,  $p<.01$ )。

## 12) 退所後、乱用すると思う理由(上記11)で退所後「多分やる」「絶対やる」と答えた者のみ)(表36)

上記退所後乱用すると思うと答えた者にその理

由を尋ねた。男性では「誘われたらやると思う」および「なんとなくそう思うから」が多かった。女性では「いまもやりたいと思うっている」、「誘われたらやると思う」「なんとなくそう思うから」、「嫌なことがあったらやると思うから」が多かった。

## 13) ブタンと有機溶剤の比較1:「薬物として良いと感じるのはどちらか?」(表37, 表38)

ブタンと有機溶剤の乱用合併者にブタンと有機溶剤の比較について尋ねた。

「薬物として良いと感じるのはどちらか」を尋ねたところ、男性ではブタンと有機溶剤の間に大きな差はなかったが、女性では有機溶剤が良いと回答した者43人(61.4%)がブタンが良いと回答した者10人(14.3%)より多かった( $\chi^2=9.0$ , d. f. =2,  $p<.01$ )。

また、その理由について選択肢から選んでもらった(複数回答あり)。ブタンを好む者では「手に入れやすい」22人(84.6%)「使い方が簡単」15人(57.7%)が多かったが、有機溶剤を好む者では「気持ちが良い」51人(85.0%)が最も多かった。

また「警察などにつかまりにくい」をあげた者は、ブタンを好む者では12人(46.2%)と多かったが、有機溶剤を好む者では3人(5.0%)と著しく少なかった。

「幻覚が強い」および「効き目がはやい」はブタンを好む者と有機溶剤を好む者の間で有意差はなかったが、その他の理由はすべてブタンを好む者と有機溶剤を好む者の間で有意差がみられた。

## 14) ブタンと有機溶剤の比較2:「薬物としてやめられなくなるのはと感じるのはどちらか?」(表39)

ブタンと有機溶剤の乱用合併者に「薬物としてやめられなくなるのはと感じるのはどちらか?」を尋ねた。有機溶剤の方がやめられなくなると答えた者が男女それぞれ23人(40.4%)、48人(68.6%)と多かったが、性差はなかった( $\chi^2=4.2$ , d. f. =2, ns)。

## 15) ブタンと有機溶剤の比較3:「害があると思うのはどちらか?」(表40)

有機溶剤の方が有害であるとした者が男女それぞれ21人(36.8%)、33人(47.1%)と多かったが、

表41 ブタンと有機溶剤のうち、はやっていたのは  
(ブタンおよび有機溶剤同時乱用者)

	男性乱用者		女性乱用者	
	人数	%	人数	%
ブタン	13	22.8	8	11.4
有機溶剤	22	38.6	39	55.7
どちらも、はやっていなかった	3	5.3	3	4.3
どちらも同じくらいはやっていた	9	15.8	18	25.7
無回答	10	17.5	2	2.9

( $\chi^2=5.3$ , d.f.=3, ns)

表42 周囲の大麻乱用による害のあるもの者

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
いた	27	4.9	47	15.6
いない	430	78.2	218	72.4
無回答	93	16.9	36	12.0

( $\chi^2=25.5$ , d.f.=1, p<.01)

表43 大麻入手困難さ

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
簡単に手に入る	27	4.9	48	15.9
少々苦勞するが、なんとか手に入る	50	9.1	55	18.3
ほとんど不可能だ	42	7.6	18	6.0
絶対不可能だ	239	43.5	62	20.6
無回答	192	34.9	118	39.2

( $\chi^2=70.6$ , d.f.=3, p<.01)

表44 大麻の知識

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
知らなかった	198	36.0	54	17.9
関心がなかった	195	35.5	104	34.6
見てみたかった	49	8.9	48	15.9
試してみたかった	25	4.5	57	18.9
無回答	83	15.1	38	12.6

( $\chi^2=71.0$ , d.f.=3, p<.01)

表45 大麻乱用開始年齢

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
10歳以下				
11歳			2	4.2
12歳	5	18.5	12	25.0
13歳	7	25.9	14	29.2
14歳	7	25.9	15	31.3
15歳以上	2	7.4	2	4.2
経験はあるが年齢はおぼえていない			2	4.2
無回答	6	22.2	1	2.1

( $\chi^2=2.6$ , d.f.=5, ns)

表46 最もしていた時の大麻乱用頻度

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
1年で数回	8	29.6	16	33.3
月に数回以上	8	29.6	25	52.1
ほとんど毎日	1	3.7	5	10.4
無回答	10	37.0	2	4.2

( $\chi^2=0.9$ , d.f.=2, ns)

表47 大麻乱用への態度(男性)

	大麻乱用			
	経験有		経験無	
	人数	%	人数	%
法律で禁じられているから、すべきではないと思う	4	14.8	355	70.2
法律で禁じられてはいるが、少々ならかまわないと思う	11	40.7	53	10.5
法律で禁じられてはいるが、それを守る必要は全然ないと思	7	25.9	25	4.9
無回答	5	18.5	73	14.4

( $\chi^2=52.2$ , d.f.=2, p<.01)

性差はなかった( $\chi^2=6.0$ , d. f.=4, ns).

#### 16) ブタンと有機溶剤の比較4:「周囲ではやっていたのはどちらか?」(表41)

「有機溶剤がはやっていた」とした者が男女それぞれ22人(38.6%), 39人(55.7%)とも多かったが女性でより多い傾向を示した。また、「どちらも同じくらいはやっていた」とした者も男女それぞれ9人(15.8%), 18人(25.7%)と女性でより多い傾向を示した。ブタンの方がはやっていたとした者は男性が13人(22.8%)で女性の8人(11.4%)より多かった。

### (5) 大麻

#### 1) 周囲の大麻乱用による害がある者(表42)

身近に大麻乱用の結果、病気や異常になった人がいたかどうか訪ねた。

その結果、男性の27人(4.9%), 女性の47人(15.6%)が身近に大麻乱用の結果と思われる異常を訴えていた人がいたと答えていた。大麻乱用による害のある者も女性の周囲に多かった( $\chi^2=25.5$ , d. f.=1,  $p<.01$ ).

#### 2) 大麻入手性困難さ(表43)

大麻の入手が困難であるかどうかについて尋ねた。

簡単に手に入るとしたものは、男性では27人(4.9%), 女性では48人(15.9%)であり、女性の方が簡単に手に入るとものが多かった( $\chi^2=70.6$ , d. f.=3,  $p<.01$ ).

#### 3) 大麻の知識(表44)

「大麻を吸う前使ったことがない人は施設入所前)、大麻についてあなたはどのように思っていたか」を尋ねた。「見てみたかった」および「試してみたかった」という大麻乱用への関心を示した者が男性の74人(13.4%), 女性の105人(34.8%)を占めており、女性の方が男性より関心が高かった( $\chi^2=71.0$ , d. f.=3,  $p<.01$ ).

#### 4) 大麻の乱用開始年齢(表45)

大麻乱用者に乱用開始年齢を尋ねた。男女とも、乱用者が少なくはっきりした大麻使用開始年齢のピークは判断しがたいが、13歳から14歳が開始年

齢として多い。

#### 5) 最もしていた時の大麻乱用頻度(表46)

大麻乱用経験者に最も吸引していた時期の吸引頻度を尋ねた。男性では無回答が10人(37.0%)と多かった。男性回答者では「年数回」と「月に数回以上」がほぼ半数ずつを占めた。一方、女性でも「月に数回以上」25人(52.1%)が半数以上で最も多かった。乱用頻度に性差は見られなかった( $\chi^2=0.9$ , d. f.=2, ns).

#### 6) 大麻乱用への態度(表47, 48)

大麻を吸うことをどう思っていたかを大麻乱用の有無で比較した。大麻非乱用者は、男性355人(70.2%), 女性102人(42.9%)が、「法律で禁じられているからすべきではないと思う」と答えていた。

一方、大麻乱用者では、「すべきではない」とした者が男女それぞれ4人(14.8%), 4人(8.3%)に過ぎなかった。大麻乱用者では「少々ならかまわないと思う」「それを守る必要は全然ない」を合わせた大麻乱用に肯定的意見が男性で18人(66.6%), 女性で43人(89.6%)を占めていた。

#### 7) 大麻禁止への態度(表49, 50)

法律で大麻を禁止していること自体への意見を尋ねた。有機溶剤乱用の場合と同様、非乱用者は、「禁止することを当然」としとするものが多いのに対し、大麻乱用者では「禁止することを当然」とした者は少なかった。大麻乱用者では「大麻くらい禁止しなくても良い」「そもそも法律で決める必要はなく、個人の好きにさせればよい」など大麻吸引に肯定的意見が男女それぞれ51.8%, 66.7%と多かった(男女それぞれ $\chi^2=52.5$ , d. f.=3,  $p<.01$ ;  $\chi^2=29.8$ , d. f.=3,  $p<.01$ ).

#### 8) 大麻の害知識(表51, 52)

大麻吸引の影響として、精神病状態、無動機症候群について尋ねた。精神病状態については、女性では乱用者が非乱用者よりも知っていた( $\chi^2=6.9$ , d. f.=1,  $p<.01$ )が、男性では乱用者と非乱用者の間で差はなかった( $\chi^2=2.4$ , d. f.=1, ns)。一方、無動機症候群については男性では乱用者が非乱用者よりも知っていた( $\chi^2=6.5$ , d. f.=1,  $p<.05$ )が、女性では差はなかった( $\chi^2=0.4$ , d. f.=1,

表48 大麻乱用への態度(女性)

	大麻乱用			
	経験有		経験無	
	人数	%	人数	%
法律で禁じられているから、すべきではないと思う	4	8.3	102	42.9
法律で禁じられてはいるが、少々ならかまわないと思う	23	47.9	68	28.6
法律で禁じられてはいるが、それを守る必要は全然ないと思	20	41.7	24	10.1
無回答	1	2.1	44	18.5

( $\chi^2=37.5$ , d.f.=2,  $p<.01$ )

表49 大麻乱用禁止への態度(男性)

	大麻乱用			
	経験有		経験無	
	人数	%	人数	%
当然だと思う	3	11.1	303	59.9
しかたないことだと思う	5	18.5	69	13.6
大麻くらい禁止しなくてもいいのではないかと思う	6	22.2	12	2.4
法律で決める必要はなく、個人の好きにさせればよいと思う	8	29.6	50	9.9
無回答	5	18.5	72	14.2

( $\chi^2=52.5$ , d.f.=3,  $p<.01$ )

表50 大麻乱用禁止への態度(女性)

	大麻乱用			
	経験有		経験無	
	人数	%	人数	%
当然だと思う	5	10.4	78	32.8
しかたないことだと思う	9	18.8	54	22.7
大麻くらい禁止しなくてもいいのではないかと思う	12	25.0	12	5.0
法律で決める必要はなく、個人の好きにさせればよいと思う	20	41.7	46	19.3
無回答	2	4.2	48	20.2

( $\chi^2=29.8$ , d.f.=3,  $p<.01$ )

ns).

「いずれも知らなかった」者は、女性では非乱用者に多かった( $\chi^2=7.1$ , d.f.=1,  $p<.01$ )が、男性では差はなかった( $\chi^2=3.1$ , d.f.=1, ns).

#### 9) 大麻で体験した症状(乱用者)(表53)

乱用者に大麻による精神症状を尋ねた。精神病状態は男性6人(22.2%)、女性21人(43.8%)にみられた。無動機症候群は男性3人(11.1%)、女性19人(39.6%)にみられた。精神病状態の体験率は性差はないが( $\chi^2=1.4$ , d.f.=1, ns), 無動機症候群の体験率は性差がある( $\chi^2=11.1$ , d.f.=1,  $p<.05$ )

#### 10) 大麻の害知識と抑止(表54)

大麻吸引の有害性の知識が大麻吸引を抑止するかどうかを検討するため、大麻による害を知っていたら吸引しなかったと思うかどうかを大麻乱用者に尋ねた。

「害を知っていたら吸引しなかったと思う」と

答えた大麻乱用者は、男女それぞれ4人(14.8%)、6人(12.5%)にすぎず、「やはりしていたと思う」と答えた者が多かった。

#### 11) 施設退所後、乱用しないと思うか(大麻乱用者のみ)(表55)

今回施設を退所した後、大麻を再び乱用すると思うかどうかを乱用者に尋ねた。その結果、男女ともほとんどの者が「多分やらないと思う」あるいは「絶対やらないと思う」と答えていた。

#### (6) 覚せい剤

##### 1) 周囲で覚せい剤による害のある者(表56)

身近に覚せい剤乱用の結果、病気や異常になった人がいたかどうか訪ねた。

その結果、男性の54人(9.8%)、女性の80人(26.6%)が身近に覚せい剤乱用の結果と思われる異常を訴えていた人がいたとしており、女性の周囲に有意に害のある者が多かった( $\chi^2=41.3$ , d.f.=1,



表51 大麻の薬害知識(男性)

	大麻乱用			
	経験有		経験無	
	人数	%	人数	%
精神病状態	9	33.3	105	20.8 <sup>1)</sup>
無動機症候群	8	29.6	63	12.5 <sup>2)</sup>
いずれも知らなかった	14	51.9	331	65.4 <sup>3)</sup>

1)  $\chi^2=2.4$ , d.f.=1, ns  
 2)  $\chi^2=6.5$ , d.f.=1, p<.05  
 3)  $\chi^2=3.1$ , d.f.=1, ns

表53 大麻で体験した症状(乱用者)

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
精神病状態	6	22.2	21	43.8 <sup>1)</sup>
無動機症候群	3	11.1	19	39.6 <sup>2)</sup>

1)  $\chi^2=1.4$ , d.f.=1, ns  
 2)  $\chi^2=4.6$ , d.f.=1, p<.05

表55 施設退所後、乱用しないと思うか(大麻乱用者のみ)

	男性乱用者		女性乱用者	
	人数	%	人数	%
絶対やらないと思う	18	66.7	23	47.9
多分やらないと思う	7	25.9	21	43.8
多分やると思う			3	6.3
絶対やると思う				
無回答	2	7.4	1	2.1

( $\chi^2=4.2$ , d.f.=2, ns)

表57 覚せい剤の入手性

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
簡単に手に入る	32	5.8	62	20.6
少々苦労するが、なんとか手にする	46	8.4	68	22.6
ほとんど不可能だ	50	9.1	17	5.6
絶対不可能だ	242	44.0	51	16.9
無回答	180	32.7	103	34.2

( $\chi^2=112.8$ , d.f.=3, p<.01)

表59 覚せい剤乱用への誘い

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
ある	57	10.4	119	39.5
ない	336	61.1	120	39.9
無回答	157	28.5	62	20.6

( $\chi^2=92.1$ , d.f.=1, p<.01)

表52 大麻の薬害知識(女性)

	大麻乱用			
	経験有		経験無	
	人数	%	人数	%
精神病状態	30	62.5	89	37.4 <sup>1)</sup>
無動機症候群	15	31.3	57	23.9 <sup>2)</sup>
いずれも知らなかった	16	33.3	117	49.2 <sup>3)</sup>

1)  $\chi^2=6.9$ , d.f.=1, p<.01  
 2)  $\chi^2=0.4$ , d.f.=1, ns  
 3)  $\chi^2=7.1$ , d.f.=1, p<.01

表54 大麻の薬害知識と乱用抑止(大麻乱用者のみ)

	男性乱用者		女性乱用者	
	人数	%	人数	%
しなかったと思う	4	14.8	6	12.5
やはりしていたと思う	14	51.9	37	77.1
無回答	9	33.3	5	10.4

( $\chi^2=1.1$ , d.f.=1, ns)

表56 周囲の覚せい剤薬害者

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
いた	54	9.8	80	26.6
いない	441	80.2	193	64.1
無回答	55	10.0	28	9.3

( $\chi^2=41.3$ , d.f.=1, p<.01)

表58 覚せい剤への関心

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
覚せい剤は知らなかった	158	28.7	27	9.0
関心がなかった	255	46.4	117	38.9
見てみたかった	54	9.8	51	16.9
試してみたかった	16	2.9	64	21.3
無回答	67	12.2	42	14.0

( $\chi^2=115.8$ , d.f.=3, p<.01)

表60 覚せい剤乱用開始年齢

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
10歳以下	2	14.3		
11歳			1	2.4
12歳			8	
13歳	2	14.3	13	31.7
14歳	2	14.3	11	26.8
15歳			3	7.3
経験はあるが年齢はおぼえていない			1	2.4
無回答	8	57.1	4	9.8

( $\chi^2=14.5$ , d.f.=6, p<.05)

p<.01).

## 2) 覚せい剤入手性(表57)

覚せい剤の入手が困難であるかどうかについて尋ねた。

簡単に手に入るとした者は、男性では32人(5.8%)、女性では62人(20.6%)、また少々苦勞するが手に入ると答えた者が男性46人(8.4%)、女性68人(22.6%)であり、女性の方が簡単に手に入るとする者が多かった( $\chi^2=112.8$ , d. f.=3, p<.01)。

## 3) 覚せい剤への関心(表58)

「覚せい剤を使う前(使ったことがない人は施設入所前)、覚せい剤についてどう思っていたか」を尋ねた。「見てみたかった」および「試してみたかった」という覚せい剤への関心を示した者が男性の70人(12.7%)、女性の115人(38.2%)を占めた。女性は男性よりも覚せい剤乱用以前から覚せい剤への関心が高かった( $\chi^2=115.8$ , d. f.=3, p<.01)。

## 4) 覚せい剤乱用への誘い(表59)

「入所前、覚せい剤の使用を誘われたことがあるかどうか」を尋ねた。男性では57人(10.4%)、女性では119人(39.5%)が覚せい剤乱用に誘われていた( $\chi^2=92.1$ , d. f.=1, p<.01)。この質問項目では無回答が男女それぞれ157人(28.5%)、62人(20.6%)と多いためその点を考慮する必要がある。

## 5) 覚せい剤の乱用開始年齢(表60)

覚せい剤乱用者にはじめて覚せい剤を乱用した年齢を尋ねた。男性では無回答が半数以上と多かった。女性では、13歳13人(31.7%)と14歳11人(26.8%)が多かった。

## 6) 覚せい剤の乱用頻度(表61)

覚せい剤乱用者が最も乱用していた時期にどの程度乱用していたかを尋ねた。男性では、回答した者では「年に数回」がほとんどであった。女性では「月に数回」15人(36.6%)と「年に数回」14人(34.1%)が同程度に多いが、「ほとんど毎日」とした者も7人(17.1%)いた。この質問項目でも無回答が男女それぞれ8人(57.1%)、5人(12.2%)と多いため信頼性は乏しい。

## 7) 覚せい剤の乱用方法(表62)

乱用方法を「吸引」「注射」「吸引と注射」に分けて尋ねた。吸引のみを乱用方法としてあげた者が男女それぞれ5人(35.7%)、16人(39.0%)と最も多かった。古典的使用法である注射のみをあげた者は男女それぞれ2人(14.3%)、9人(22.0%)であった。「吸引と注射」をあげた者女性のみで12人(29.3%)であった。男性では無回答が7人(50.0%)いた。乱用方法に性差は認められなかった( $\chi^2=3.3$ , d. f.=2, ns)。

## 8) 覚せい剤への態度(表63, 64)

男女別乱用経験別に覚せい剤への態度を比較した。覚せい剤乱用者は、非乱用者よりも「すべきではない」とした者が少なく、「少々ならかまわないと思う」「それを守る必要は全然ない」など覚せい剤乱用に肯定的意見が多かった(男女それぞれ $\chi^2=12.3$ , d. f.=2, p<.01;  $\chi^2=14.4$ , d. f.=2, p<.01)。

## 9) 覚せい剤禁止への態度(表65, 66)

法律で覚せい剤を禁止していること自体への意見を尋ねた。「そもそも法律で決める必要はなく、個人の好きにさせればよい」という覚せい剤使用に肯定的意見は、男性では乱用者5人(35.7%)は非乱用者56人(10.8%)より多かった( $\chi^2=7.5$ , d. f.=2, p<.05)が、女性では乱用者15人(36.6%)、と非乱用者57人(23.5%)の間で差は見られなかった( $\chi^2=1.9$ , d. f.=2, ns)。

## 10) 覚せい剤の害知識(表67, 68)

覚せい剤吸引の影響として、精神病状態、フラッシュバックについて尋ねた。男性ではこれら害知識について乱用者と非乱用者の間で差はなかった(それぞれ、 $\chi^2=0.0$ , d. f.=1, ns;  $\chi^2=1.1$ , d. f.=1, ns)。一方、女性では乱用者の方が精神病状態、フラッシュバックの害を知っていたる頻度が高かった(それぞれ、 $\chi^2=12.9$ , d. f.=1, p<.01;  $\chi^2=12.6$ , d. f.=1, p<.01)。

また全体に女性は男性よりも覚せい剤吸引の影響を知っているものが多かった。

## 11) 覚せい剤の害体験率

覚せい剤乱用者に、精神病状態、フラッシュバ

表61 覚せい剤乱用頻度

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
1年で数回	5	35.7	14	34.1
月に数回以上	1	7.1	15	36.6
ほとんど毎日			7	17.1
無回答	8	57.1	5	12.2

( $\chi^2=4.3$ , d.f.=2, ns)

表62 覚せい剤の乱用方法

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
吸引	5	35.7	16	39.0
注射	2	14.3	9	22.0
吸引と注射			12	29.3
無回答	7	50.0	4	9.8

( $\chi^2=3.3$ , d.f.=2, ns)

表63 覚せい剤への態度(男性)

	覚せい剤乱用			
	経験有		経験無	
	人数	%	人数	%
法律で禁じられているから、すべきではないと思う	7	50.0	378	72.7
法律で禁じられてはいるが、少々ならかまわないと思う	2	14.3	51	9.8
法律で禁じられてはいるが、それを守る必要は全然ない	4	28.6	29	5.6
無回答	1	7.1	62	11.9

( $\chi^2=12.3$ , d.f.=2, p<.01)

表64 覚せい剤への態度(女性)

	覚せい剤乱用			
	経験有		経験無	
	人数	%	人数	%
法律で禁じられているから、すべきではないと思う	12	29.3	103	42.4
法律で禁じられてはいるが、少々ならかまわないと思う	12	29.3	67	27.6
法律で禁じられてはいるが、それを守る必要は全然ない	15	36.6	27	11.1
無回答	2	4.9	46	18.9

( $\chi^2=14.4$ , d.f.=2, p<.01)

表65 覚せい剤禁止への態度(男性)

	覚せい剤乱用			
	経験有		経験無	
	人数	%	人数	%
当然だと思う	7	50.0	327	62.9
しかたないことだと思う	1	7.1	65	12.5
法律で決める必要はなく、個人の好きにさせればよいと思	5	35.7	56	10.8
無回答	1	7.1	72	13.8

( $\chi^2=7.5$ , d.f.=2, ns)

表66 覚せい剤禁止への態度(女性)

	覚せい剤乱用			
	経験有		経験無	
	人数	%	人数	%
当然だと思う	13	31.7	87	35.8
しかたないことだと思う	10	24.4	53	21.8
法律で決める必要はなく、個人の好きにさせればよいと思	15	36.6	57	23.5
無回答	3	7.3	46	18.9

( $\chi^2=1.9$ , d.f.=2, ns)

表67 覚せい剤の薬害知識(男性)

	覚せい剤乱用			
	経験有		経験無	
	人数	%	人数	%
精神病状態	4	28.6	153	29.4 1)
フラッシュバック	5	35.7	119	22.9 2)
いずれも知らなかった	7	50.0	294	56.5 3)

1)  $\chi^2=0.0$ , d.f.=1, n.s.  
2)  $\chi^2=1.1$ , d.f.=1, n.s.  
3)  $\chi^2=0.4$ , d.f.=1, n.s.

表69 覚せい剤の薬害知識と抑止

	男性乱用者		女性乱用者	
	人数	%	人数	%
使わなかったと思う	4	28.6	6	14.6
やはり使ったと思う	5	35.7	29	70.7
無回答	5	35.7	6	14.6

( $\chi^2=3.0$ , d.f.=1, ns)

ックの体験について尋ねた。男性では精神病状態およびフラッシュバックを体験したことがある者は乱用者14人中いずれも1人であった。一方、女性では、精神病状態、フラッシュバックの体験した者はそれぞれ21人(15.9%)、14人(34.1%)いた。

#### 12) 覚せい剤の乱用による害知識と抑止(表69)

覚せい剤の害知識が覚せい剤吸引を抑止するかどうかを覚せい剤乱用者に尋ねた。「害を知っていたら吸引しなかったと思う」が男性4人(28.6%)、女性6人(14.6%)であった。「やはり使っていたと思う」とする者が、男性で5人(35.7%)、女性で29人(70.7%)いた。

#### 13) 施設退所後、乱用しないと思うか(覚せい剤乱用者のみ)(表70)

今回、施設を退所した後覚せい剤を再び乱用すると思うかどうかを乱用者に尋ねた。その結果、男性では回答全員「多分やらないと思う」あるいは「絶対やらないと思う」と答えていた。女性では5人(12.2%)が「多分やらないと思う」と答えていた。

#### 14) 各薬物乱用頻度の年代変化(表71, 表72)

平成6年、平成8年、平成10年、平成12年の従来調査と今回の結果を表71に示した。

有機溶剤乱用は男性において一貫して減少している。女性有機溶剤乱用者は平成8年以降乱用者

表68 覚せい剤の薬害知識(女性)

	覚せい剤乱用			
	経験有		経験無	
	人数	%	人数	%
精神病状態	35	85.4	123	50.6 1)
フラッシュバック	32	78.0	106	43.6 2)
いずれも知らなかった	4	9.8	76	31.3 3)

1)  $\chi^2=12.9$ , d.f.=1, p<.01  
2)  $\chi^2=12.6$ , d.f.=1, p<.01  
3)  $\chi^2=10.2$ , d.f.=1, p<.01

表70 施設退所後、乱用しないと思うか(覚せい剤乱用者のみ)

	男性乱用者		女性乱用者	
	人数	%	人数	%
絶対やらないと思う	10	71.4	22	53.7
多分やらないと思う	2	14.3	12	29.3
多分やると思う			5	12.2
絶対やると思う				
無回答	2	14.3	2	4.9

( $\chi^2=3.3$ , d.f.=1, ns)

率50%前後で推移している。

大麻は男性では平成6年から平成8年にかけて乱用率が5.5%から6.7%に増加したが、平成10年以降5%前後である。女性では、平成6年22.0%、平成8年19.0%、平成10年14.4%と漸減したが平成12年14.7%、平成14年15.9%であまり変化していない。

覚せい剤は男性では平成6年1.2%から平成12年5.0%まで増加してきたが、今回2.5%と低下した。女性では平成6年6.6%から平成10年16.9%まで増加したが、平成12年15.2%から平成14年13.6%と低下傾向である。

#### 15) 薬物乱用に対する規範意識(表73)

薬物その他各種逸脱行動30項目に対する規範意識について、「絶対にいけない」、「少しなら構わない」、「ある程度構わない」、「まったく構わない」の4件法(それぞれ1点から4点)で回答してもらった。質問内容は「かっとなってナイフで人を刺す」などの明らかな違法行為から「親の言うことを聞かない」などの日常生活上のことまで広く含んでいる。点数の低い項目ほどいけないことと判断され、規範意識が高い項目と考えられる。

男性では「かっとなってナイフで人を刺す」が最もいけないこととされ、以下「覚せい剤を使う」、「マリファナを吸う」「火をつける」「ブタンパン遊びをする」「ひったくりをする」「シンナーを吸

表71 薬物乱用生涯経験率の年代変化(男性)

	単位:%				
	平成6年	平成8年	平成10年	平成12年	平成14年
有機溶剤	41.2	37.3	30.3	26.4	21.6
大麻	5.5	6.7	4.8	5.0	4.9
覚せい剤	1.2	1.7	3.9	5.0	2.5

表72 薬物乱用生涯経験率の年代変化(女性)

	単位:%				
	平成6年	平成8年	平成10年	平成12年	平成14年
有機溶剤	59.6	50.6	48.5	52.3	46.5
大麻	22.0	19.0	14.4	14.7	15.9
覚せい剤	6.6	10.8	16.9	15.2	13.6

表73 問題行動に対する規範意識得点

	男性	女性
頭にきてナイフで人を刺してしまう	1.1	1.1
覚せい剤を使う(エス, スピード, シャブ)	1.1	1.4
マリファナを吸う(大麻, ハッパ, ハシッシ)	1.2	1.4
置いてある物や家に火をつける	1.2	1.2
ガスパン遊びをする(ライター用, カセットコンロ用など)	1.2	1.5
ひったくりをする	1.3	1.5
シンナーを吸う(トルエン, ボンドマニキュアも含む)	1.3	1.7
アツアゲをする(おどかして金品を取る)	1.4	1.7
人の持ち物を壊す	1.4	1.5
売春(援助交際)をする	1.4	1.8
バイクや自動車を盗む	1.4	1.8
万引きをする	1.5	1.8
自分の家から黙ってお金を持ち出す	1.5	1.8
暴力団の人とつきあう	1.5	2.3
無免許運転をする	1.5	1.9
気に入らない相手を殴る	1.6	2.0
放置してある自転車を乗ってしまう	1.7	2.1
根性焼きをする	1.8	2.2
友達にウソをつく	1.8	2.0
刺青(いれずみ)をする	1.8	2.3
いろいろな人とセックスをする	1.8	2.1
電車やバス内で友達同士で大声で喋る	1.8	2.6
何日か無断で家に帰らない	1.9	2.4
親の言うことを聞かない	1.9	2.3
飲酒をする	2.0	2.7
不良グループとつきあう	2.0	2.6
学校をサボる	2.1	2.6
タバコを吸う	2.2	2.8
学校で禁止されている服装や髪型をする	2.2	2.9
夜中に遊び歩く	2.3	2.8

う」「アツアゲをする」の順となっている。

女性では、「かっとなつてナイフで人を刺す」が最もいけないこととされ、以下「火をつける」「覚せい剤を使う」「マリファナを吸う」「ボタン遊びをする」「ひったくりをする」「人の物を壊す」の順となっている。

一方、許容度の高い項目としては、男性では得点の高い順に「夜中に遊び歩く」「学校で禁止されている服装や髪型をする」「タバコを吸う」「学校をサボル」、女性では「学校で禁止されている服装や髪型をする」「夜中に遊び歩く」「タバコを吸う」「飲酒をする」などである。

男女とも覚せい剤乱用、大麻乱用、有機溶剤乱用、ボタン乱用などの薬物乱用はいずれも高得点であった。

## D. 考察

### 1. 方法論上の問題点

#### (1) 対象者の代表性

本研究は入所非行児の薬物乱用の実態調査であり、対象者は非行児全体の代表ではない。

入所非行児は一般の非行母集団よりも非行度が進んでいると考えられる。しかし、児童自立支援施設入所は、家庭での監督が困難と判断される児童が入所させられるので、単に反社会行動の程度だけでなく家庭状況も考慮される。そのため、同程度の反社会行動が認められても家庭状況が悪ければ入所させられ、家庭状況がそれほど悪くなければ自宅での指導となったりする。また、児童自立支援施設の目的がかってても教護院時代の非行性除去ではなく児童への支援となっており、入所対象そのものが変化してきている。したがって、本調査はあくまで児童自立支援施設児の実態であり過度に普遍化することはできない。

#### (2) 対象数の変動

われわれの全国児童自立支援施設薬物乱用実態調査の回答数は、平成6年1339人、平成8年1194人、平成10年1315人、平成12年1327人と従来1200人から1300人前後で一定していたが、今回は851人と少なかった。今回、施設からの回収率が低かった理由の一つとして、同時期に児童自立支援施設に

別の全国調査が実施されていたため施設側の都合により本調査への協力が困難であったことが考えられる。また、本調査は比較的質問数が少ないとはいえ、児童および施設にとって調査協力はやはり負担であると思われるので、各年の調査に対して協力が次第に困難になっている可能性もある。今後、調査を継続するにあたり回収率が低下しないようにする必要があると考える。

また、回答回収率には地域差が大きかった。薬物乱用は文化的影響が大きいため特定地域の応答率の多少が全体結果に影響することが考えられる。

### (3) 無回答率の問題

無回答を減らすために無記名式の質問紙調査としているが、質問内容が薬物乱用という反社会行動であるため無回答が多い。非行児本人の薬物乱用経験の質問では3%から5%が無回答であった。乱用率が数%程度の薬物では乱用頻度と無回答率があまり変わらないこととなる。無回答者においては薬物乱用者が多い可能性があるため、特に乱用率の低い薬物では乱用率の信頼性が乏しくなると考えられる。男性では有機溶剤およびボタン以外の大麻、覚せい剤、コカイン、睡眠薬、安定剤、咳止め液、女性ではコカイン、安定剤、咳止め液が乱用率が数%であり乱用率結果の信頼性は低いと思われる。

### 2. 薬物乱用頻度の性差

入所非行児の薬物乱用の性差については、従来と同様、有機溶剤、大麻、覚せい剤、ボタンのいずれの薬物も女性の方が男性よりも乱用頻度が高かった。また、前回対象薬物ではなかったコカイン、睡眠薬、安定剤、咳止め液、女性ではコカイン、安定剤、咳止め液も、男性より女性の方が薬物乱用率も高かった。

警察白書によれば、有機溶剤、大麻、覚せい剤により検挙された少年は、いずれも男性の方が女性よりも多い。また和田による全国中学生調査でも男性の方が女性より有機溶剤、大麻、覚せい剤の乱用率が高いという結果が得られている。

したがって、われわれの調査対象である入所非行児においては一貫して女性の薬物乱用率が男性のそれよりも高いが、これは一般の少年を対象と

した他の資料と一致していないことになる。

この理由として、一つには男子非行では薬物よりも暴力や窃盗などが施設入所理由となることが多く、女子非行では性非行や薬物非行が重要な入所理由となりやすいことが考えられる。児童保護の観点から、薬物問題は男性より女性で重要となりやすい。児童自立支援施設への入所は児童相談所や家庭裁判所の判断によるので、女性の方が薬物乱用をしたことによって施設入所になる可能性が高いと思われる。

施設においては女性に薬物非行が多く、また女子の場合薬物乱用が性被害と結びつきやすいので、入所非行児への指導方法が男性と女性で異なると思われる。

### 3. 薬物乱用の地域差

今回乱用者の頻度地域ごとの検討したが、薬物の種類により地域特徴が認められた。しかし、地域ごとの対象人数はそれほど多くないので乱用率などの結果の変動は大きい。平成12年度調査では、有機溶剤乱用および覚せい剤乱用頻度は関西地域が高く、ブタン乱用は地域差があまりなかった。今回は北海道・東北地方で有機溶剤乱用、ブタン乱用、大麻乱用などが多かったが、上述のようにやや対象数が少ないこともありその理由ははっきりしない。

### 4. 薬物乱用の年代変化

#### (1) 覚せい剤乱用頻度

警察白書によれば、検挙された覚せい剤乱用少年は平成7年頃より増加し、平成10年より減少傾向にある。これに対して、われわれの児童自立支援施設調査の覚せい剤乱用頻度は、男性では平成6年(1.2%)から平成12年(5.0%)まで増加傾向にあり、今回平成14年度に2.5%へと始めて減少に転じた。女性では平成6年(6.6%)から平成10年(16.9%)まで急増し、その後は平成12年(15.2%)、平成14年(13.6%)とやや減少傾向であるが大きな変化はない。

今回の対象者のうち1年以上入所している者が男女とも30%以上いる。これらの対象者では1年以上前の薬物経験を訪ねていることになるので警察統計の年度と直接比較し評価することは難しい。

また、前述のように対象施設の変動の問題より解釈には注意が必要である。前回までは調査対象数が1200人から1300人ほどであったが、今回は調査数が851人と以前より少なかった。したがって、対象人数がこれまでより少ないこともあり結果の解釈には注意が必要である。

これらの点を考慮すると児童自立支援施設入所児童自立支援施設における覚せい剤乱用頻度について断定的なことは言えないが、平成12年までの増加傾向がやや落ち着いてきたように思われる。

#### (2) 有機溶剤乱用頻度

男性では平成6年度調査より有機溶剤乱用は一貫して減少しており、平成6年度から今回平成14年まで2年おきに41.2%、37.3%、30.3%、26.4%、21.6%となっている。

一方、女性では平成6年から平成10年までの59.6%、50.6%、48.5%と減少したが、平成12年は52.3%とやや上昇し、今回46.5%減少した。したがって女性では平成8年以降50%前後で変動しているが、一定の傾向は見られないように思われる。

有機溶剤乱用により検挙された少年数は平成3年ごろは2万人前後であったがその後漸減し、平成12年には3417人までに減少した。有機溶剤乱用も覚せい剤乱用と同様解釈には注意を要すが、入所非行児の有機溶剤乱用者数の動向は検挙少年数との変化と類似していると思われる。

#### (3) 大麻乱用

大麻乱用は、男性では平成6年および平成8年は5.5%、6.7%であったが、平成10年、平成12年、平成14年とほぼ5%前後で変化していない。女性では、平成6年から平成10年まで22.0%、19.0%、14.4%と漸減し、その後平成12年14.7%、平成14年15.9%とあまり変化していない。

全体として入所非行児の大麻乱用は平成10年以降大きな変化はないようである

### 5. 薬物への態度と薬物乱用

従来調査と同様に、今回対象薬物について、各薬物の乱用についてどう思うか、および法律で薬物乱用を禁止していることをどう思うかを尋ねた。全体として従来の結果とほぼ同様な結果が得られた。すなわち、乱用者は非乱用者よりも薬物乱用に許容的であり、また乱用を法律で禁止する

必要はなく個人の好きにすればよいと考える傾向にある。また、乱用者、非乱用者に限らず女性の方が男性より薬物乱用に許容的である。

## 6. 害知識

薬物乱用による害については社会的にいろいろな教育活動が行われているが、具体的害について知らない児童が依然多い。特に非乱用者この傾向が強い。乱用者の方が非乱用者よりも害知識がある理由として乱用後に薬物乱用集団から知識を得たという可能性もあるが、少なくとも単純に害知識がないために薬物に手を出したとはいえないことを示唆している。

具体的害知識が乱用前からあったら乱用しなかったかどうかという、害知識と乱用抑止の関係も前回同様に検討した。その結果、やはり前回同様な傾向にあった。結果に示したとおり、もし害を知っていたら使用しなかったと答えた者は少なく、大多数は害知識があっても使用したと答えている。これは、単なる知識としての啓蒙教育で防げるの薬物乱用は全体の一部に過ぎないことを予測させる。ただ、今回も薬物の害について質問紙で簡単に尋ねただけなので、十分な啓蒙教育を実際に実施にその前後で態度の変化を測定しなければ教育による態度変容の効果を判定することは難しい。

## 7. 害体験率

精神症状の判断はやはり直接面接調査でないとし難く、質問紙法による精神症状の体験率は信頼性が低いと考えるべきであり、あくまで参考程度と考えている。

有機溶剤による症状の体験としては、幻覚などの精神病状態が男女とも最も多く、30%から40%に認められているという結果が得られた。またフラッシュバックの体験も男女とも20%以上あった。症状の体験として多発神経炎や無動機症候群についても尋ねているが、これらは非行児が自分で正しく判断できる症状ではないので症状の発現率としてはかなり不正確と思われる。無動機症候群などに比べると幻覚やフラッシュバックは本人でも症状を把握しやすいのである程度症状発現率は把握できると思われる。有機溶剤による幻覚やフラッシュバックの発現率に性差はなかった。

有機溶剤の次に乱用の多いブタンでは、精神病

症状の発現頻度は男女それぞれ15.6%、32.1%であった。これは有機溶剤による精神病症状よりも少ない。またフラッシュバックも有機溶剤乱用よりもやや少なかった。これらよりブタンは有機溶剤よりも精神症状発現効果は低いと推測される。

各薬物による精神症状発現率は今後さらに資料を集める必要がある。

## 8. ブタン乱用と有機溶剤乱用の比較

従来あまり注目されていないブタン乱用について有機溶剤乱用と比較検討した。ブタン乱用と有機溶剤乱用を比較した理由は、第一にブタン乱用が大麻乱用や覚せい剤乱用などより多く有機溶剤乱用に次ぐ乱用率を示しているためである。第二ブタンは成分的に有機溶剤に近く乱用による薬理効果が類似していると考えられるからである。そのためブタン乱用が有機溶剤乱用の代替薬物となっている可能性を考えたためである。

本研究ではブタンと有機溶剤合併乱用者の薬物としての好みを尋ねた。酩酊感を理由に有機溶剤の方がブタンよりも良いとする者が多かった。この傾向は女性で強かった。しかし薬物が好まれる理由としての幻覚や効果発現時間についてブタンと有機溶剤の間で差はみられていない。したがって、幻覚体験などは少年によって差があり、ブタンの方が幻覚を体験する者もいるようである。

ブタンの方をより好む理由としては、「使い方が簡単」「警察などに捕まりにくい」など利便性があげられることが多かった。現在、有機溶剤は取締対象の違法薬物であるがブタンは日用品として取締対象ではない。したがって、効果は有機溶剤よりも弱いが手に入れやすく注意も受けなため乱用されていると思われる。

ブタンと有機溶剤合併乱用者は、ブタンよりも有機溶剤の方が止められなくなると感じている者が多く、依存性は有機溶剤の方が高いと推測される。しかし、手軽さという点でかなりの頻度でブタン乱用が行われていることは注意を要する。手軽にブタン乱用をし、その後より重大な薬物に手を出さずきっかけとなっている可能性がある。本調査で現在でもブタンよりも有機溶剤乱用の方がはやっていると回答している者が多かったが(表4-1)、「どちらも同じようにはやっていた」「ブタンの方がはやっていた」をあわせると男女とも40%弱になり、ブタン乱用はかなり行われていると思



われる。

## 9. 薬物乱用への規範意識

これまでのわれわれの研究で乱用者においても薬物はいけないことであり害を知っていても薬物乱用をしてしまう傾向が認められている。

そこで本年度薬物乱用への規範意識を他の非行行動との比較で検討した。その結果、30項目の問題行動中各種薬物乱用への規範意識は高く、やってはいけないこと認知されていることが認められた。男性では30項目中覚せい剤乱用、大麻乱用、ブタン乱用、有機溶剤乱用はそれぞれ、2番目、3番目、5番目、7番目にいけないこととされていた。女性では覚せい剤乱用、大麻乱用、ブタ乱用、有機溶剤乱用はそれぞれ、3番目、4番目、5番目、9番目にいけないこととされていた。これらより非行児において薬物乱用は非行行動のうちでもかなりいけないことであると考えられていると思われる。

薬物乱用の問題の一つとしていけないこととわかっていてもやってしまうという点があげられる。いけないこととわかっていてもかなりの人数が薬物乱用をしているので他の非行問題よりも心理治療の意味合いが大きいと思われる。

## 10. 今後の課題

### (1) 非行少年における薬物乱用の動向

児童自立支援施設においては、児童の入所期間は1年以上になることが多い。したがって、入所非行中の薬物乱用実態は一般非行児の乱用実態からやや遅れて調査結果に反映されると考えられる。警察白書で平成10年以降覚せい剤による少年検挙数は減少し、われわれの調査で覚せい剤乱用者数は減少してきているように見える。覚せい剤乱用は有機溶剤など他の薬物乱用よりも重大な結果をもたらすので今後入所非行児においても減少するかどうか観察が必要である。また、乱用薬物として最も多い有機溶剤も入所非行児とくに男性において減少しているが、今後この傾向が持続するのか関心が持たれる。

前回の全国調査から対象薬物としてブタン乱用を追加した。ブタン乱用については今回有機溶剤との比較検討もした。ブタン乱用は有機溶剤乱用に次ぐ頻度を示しており、また手軽に入手して乱用できる薬物として認知されていた。今後ブタン

乱用の実態も注意深く追跡する必要がある。

また今回は睡眠薬や安定剤なども乱用経験を尋ねたが、これらの薬物も乱用がかなり認められたので調査対象薬物とすることを考慮したい。

### (2) 調査方法の再考

今回の調査では施設から回収率が64.9%であり以前より低下した。回収数が低下すると結果の信頼性も低下するので、今後回収率を高めることが必要である。調査時期、質問項目の内容、項目数などを検討し回収率を回復させる必要があると考える。

## 謝辞

本研究は、全国の児童自立支援施設の多くの方々のご協力により実施ができました。ご協力いただいた方々にここで深謝させていただきます。

## 参考文献

- 1) 阿部恵一郎：児童福祉施設(教護院)における有機溶剤乱用少年・少女の実態調査。平成6年度厚生科学研究費補助金「麻薬等総合対策研究事業」薬物依存研究の社会的、精神医学的特徴に関する研究 平成6年度研究結果報告書。1995
- 2) 庄司正実：全国の児童自立支援施設における薬物依存の意識・実態に関する研究 平成10年度厚生科学研究「薬物乱用・依存等の疫学的研究及び中毒性精神病患者等に対する適切な医療のあり方についての研究」。1999
- 3) 庄司正実：全国の児童自立支援施設における薬物依存の意識・実態に関する研究 平成12年度厚生科学研究「薬物乱用・依存等の実態把握に関する研究及び社会経済的損失に関する研究」。2001
- 4) 庄司正実：全国の児童自立支援施設における薬物依存の意識・実態に関する研究 平成13年度厚生科学研究「薬物乱用・依存等の実態把握に関する研究及び社会経済的損失に関する研究」。2002
- 5) 警察庁編：平成13年度警察白書。警察庁編。2002

## 調査へのお願い

この調査の目的は、飲酒・薬物などに対するみなさんの考えや経験を知ることです。この調査は、厚生労働省の科学研究費によるもので、現在、全国の一般中学生でも同様な調査が行われています。

自分の名前は書く必要はありませんし、集めた用紙もコンピュータで集計しますので、誰がどのように答えたのか分かりません。したがって、答えた内容が施設での生活や退院時期に影響することはありません。どうしても答えたくない質問には答えなくてもかまいません。

各質問に対する回答は、特にことわらない限りもっともあてはまる内容の番号を一つだけ選んで○をつけて下さい。

国立武蔵野学院 医務課長 富田 拓  
目白大学 助教授 庄司正実

あなたの年齢はいくつですか？ 年齢を記入してください \_\_\_\_\_ 歳

1 学校は？ ①小学校 ②中学校 ③高校 ④専門学校 ⑤中学卒業後で無職 ⑥就労中

2 何年生ですか？ 学年を記入してください \_\_\_\_\_ 年生

3 男性ですか、女性ですか？ ①男性 ②女性

4 今回、この施設に入所してからどのくらいになりますか？ \_\_\_\_\_ 年 \_\_\_\_\_ ヶ月

5 あなたの身近(友達、先輩、知り合い、家族など)で以下のような薬物をやっている人はいましたか？

- |                                   |     |      |
|-----------------------------------|-----|------|
| 1) シンナーやトルエン (ボンド、マニキュアの除光液なども含む) | ①いた | ②いない |
| 2) マリファナ (大麻、ハッパ、ハシッシも同じ)         | ①いた | ②いない |
| 3) 覚せい剤 (エス、スピード、シャブも同じ)          | ①いた | ②いない |
| 4) ガス (ライター用ガス、カセットコンロ用ガスなど)      | ①いた | ②いない |
| 5) コカイン (クラックも同じ)                 | ①いた | ②いない |
| 6) 睡眠薬 (病気治療以外の目的で)               | ①いた | ②いない |
| 7) 精神安定剤 (病気治療以外の目的で)             | ①いた | ②いない |
| 8) ブロン薬などのセキ止め液(病気治療以外の目的で)       | ①いた | ②いない |

9) その他の薬物 ①いた ②いない

6 あなた自身は以下のような薬物を1回でも使用したことがありますか？

- |                                  |     |     |
|----------------------------------|-----|-----|
| 1) シンナーやトルエン（ボンド、マニユキヤの除光液なども含む） | ①ある | ②ない |
| 2) マリファナ（大麻、ハッパ、ハシッシも同じ）         | ①ある | ②ない |
| 3) 覚せい剤（エス、スピード、シャブも同じ）          | ①ある | ②ない |
| 4) ガス（ライター用ガス、カセットコンロ用ガスなど）      | ①ある | ②ない |
| 5) コカイン（クラックも同じ）                 | ①ある | ②ない |
| 6) 睡眠薬（病気治療以外の目的で）               | ①ある | ②ない |
| 7) 精神安定剤（病気治療以外の目的で）             | ①ある | ②ない |
| 8) ブロン葉などのセキ止め液（病気治療以外の目的で）      | ①ある | ②ない |
| 9) その他の薬物                        | ①ある | ②ない |

7 この施設に入る前、お酒（アルコール類）をどのくらい飲んでいましたか？

- ①飲んだことはない ②1年で数回飲んだ ③月に2、3回 ④週に2、3回かそれ以上

8 施設に入る前、「シンナー遊び」のために有機溶剤（シンナー、トルエン、その他）を手に入れようとした場合、それはどの程度難しいことでしたか？

- ①簡単に手に入る ②少々苦勞するが、なんとか手に入る  
③ほとんど不可能だ ④絶対不可能だ

9 これまでに一回でも「シンナー遊び」を経験したことがありますか？ある場合は、初めて経験した年齢を選んでください

- ①経験がない ②10歳以下 ③11歳 ④12歳 ⑤13歳  
⑥14歳 ⑦15歳以上 ⑧経験はあるが年齢はおぼえていない

10 施設に入る前、最もしていた時で「シンナー遊び」をどのくらいしていましたか？

- ①したことはない ②1年で数回した ③月に数回以上した ④ほとんど毎日

11 「シンナー遊び」は法律で禁止されていますが、「シンナー遊び」をする前（したことがない人は施設入所前）、あなたは「シンナー遊び」をどう思っていましたか？

- ①法律で禁じられているから、すべきではないと思っていた  
②法律で禁じられてはいるが、少々ならかまわないと思っていた  
③法律で禁じられてはいるが、それを守る必要は全然ないと思っていた

12 法律で「シンナー遊び」を禁止しているのを「シンナー遊び」をする前（したことがない人は施設入所前）どう思っていましたか？

- ①当然だと思っていた  
②しかたないことだと思っていた  
③麻薬・覚せい剤とちがって、シンナーくらい禁止しなくてもいいのではないかと考えていた  
④そもそも法律で決める必要はなく、個人の好きにさせればよいと思っていた

13 「シンナー遊び」をしすぎたり繰り返したりすると、下のようなことが起こることがあります。「シンナー遊び」をする前(したことがない人は施設入所前)、「シンナー遊び」でおこることとして知っていたものすべてに○をつけてください。

- ①急性中毒死(吸っていてそのまま急に死ぬこと)
- ②多発神経炎(手足の筋肉や神経がおとろえ、物がつかめなくなったり、歩けなくなること)
- ③精神病状態(何もないのに物が見えたり声が聞こえたりする幻覚、誰もいないのに自分が見られているとか自分が噂されていると思いこんだりする妄想がでること)
- ④無動機症候群(何もする気がなくなり、学校を欠席したり仕事が長続きしなくなること)
- ⑤フラッシュバック(「シンナー遊び」をやめて吸わなくなったのに、疲れ・ストレス・飲酒などで、幻覚や妄想が出ること)
- ⑥いずれも知らなかった

14 「シンナー遊び」の結果、上記のような精神病状態やフラッシュバックなどを体験したことがありますか？体験したことすべてに○をつけてください。(もともと「シンナー遊び」をしていない人は⑤を選んでください)

- ①精神病状態
- ②フラッシュバック
- ③多発神経炎
- ④無動機症候群
- ⑤「シンナー遊び」はしたことがない

15 「シンナー遊び」をすると上記質問のような急性中毒死・多発神経炎・精神病状態・無動機症候群・フラッシュバックをおこすことを知っていたら「シンナー遊び」をしなかったと思いますか？(もともと「シンナー遊び」をしていない人は③を選んでください)

- ①しなかったと思う
- ②やはりしていたと思う
- ③「シンナー遊び」はしたことがない

16 この施設を出た後、「シンナー遊び」はやらないと思いますか？

- ①絶対やらないと思う
- ②多分やらないと思う
- ③多分やると思う
- ④絶対やると思う

17 「③多分やると思う」「④絶対やると思う」と答えた人は、その理由を以下から選んであてはまることすべてに○をつけてください。

- ①誘われたらやると思うから
- ②今もやりたいと思っているから
- ③いやなことがあったらやると思うから
- ④なんとなくそう思うから

18 あなたの身近に「ガスパン遊び(ガスの吸引)」の結果、病気や異常になった人がいましたか？

- ①いた
- ②いない

19 施設に入る前、「ガスパン遊び」のためのライターガスなどを手に入れようとした場合、それほどの程度難しいことでしたか？

- ①簡単に手に入る
- ②少々苦勞するが、なんとか手に入る
- ③ほとんど不可能だ
- ④絶対不可能だ

20 「ガスパン遊び」をする前(使ったことがない人は施設入所前)、「ガスパン遊び」についてあなたはどう思っていましたか？

- ①「ガスパン遊び」は知らなかった
- ②関心がなかった
- ③見てみたかった
- ④試してみたかった